

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 野村悠里

野村氏の論文は、17、18世紀のフランスで高度に発展した製本術を、残された製本技術書の検証によって復元することを目指した研究である。

論文は2部構成で、第1部は17、18世紀の製本史を扱う。第1章で、製本の様式の変化が当時の読者の心性と関連付けて概観された後、第2、3章では、1686年の王令によって書籍商・印刷業者の組合から製本職人の組合が分離独立した事情が検討される。以後、書籍商は仮綴じ本の販売しか許されず、製本職人には他国と比較にならぬほど腕をふるう余地が生まれたとする野村氏の指摘は、フランスの製本文化の特殊性を考察する上で貴重である。次いで氏は、第4章で、王室製本師を出した後に没落するパドゥルー家と手堅い製本で長く栄えたドゥローム家という二つの対照的な製本業者の製本技術を、フランス国立古文書館所蔵の遺言書や両家の実際の製本作品等の資料を活用することによって明らかにし、製本の様式の変化を跡付けることに成功している。その上で、第5章では、大多数がわが国に初めて紹介される当時の製本技術書の成立の事情と特徴が解説される。

論文第2部では、それらの技術書の読解を通して当時の製本術が復元される。まず、第1章から第4章まで、折丁をかがり、背にバンドを取り付け、小口などを飾り、背文字を箔押しするという、書籍の「立体化」の技術が順次解説される。道具のひとつひとつが精密に同定され、曖昧に記述されたその使用法が明確に読解されているが、これは、国内外のコンクールで受賞を重ねる野村氏の製本家としての実践的な知識と経験を俟って初めて可能となったことである。その知識と経験は、表紙のポワンティエ装幀とダンテル装幀の方法（——秘伝のため技術書類には記述がない）を論じた第5、6章に遺憾なく示されている。これらの装幀は、先端に模様を取り付けたフェール（型押し具）を、一定数、さまざまに組み合わせて箔押しすることによって制作されるのであるが、野村氏は実際の装幀のかすかなずれや凹凸を観察することにより、使用されたフェールの種類を特定し、次いでそれらの箔押しの順番を作業効率の観点から見事に復元してゆく。この復元の過程で、一冊の装幀における総箔押し数が明らかとなり、意外なことにポワンティエ装幀よりも、より繊細華麗なダンテル装幀においてその数が減少するという事実が初めて指摘される。野村氏はこの現象を、大量生産に向かう同時代の製本史の流れに関連付けているが、その説明はきわめて説得的である。

製本術については欧米でも研究が少なく、専門書といっても代表的な製本作品の紹介にとどまる場合が大部分である。野村氏の論文は、冒頭の読者の心性についての記述が後半の技術論的な分析にかならずしも有効には生かされていないという難点はあるにせよ、製本職人の遺言書やエチケット（作業証明書）など珍しい資料を駆使し、また解体調査の禁じられた製本作品を外側から独自の方法で検証することによって、本格的な製本術研究に道筋をつけたという観点からも高く評価されるべきである。よって審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するという結論に達した。